

国は貿易国としての影響力を低下させる一方、国内での貿易依存度は強まったわけである。この傾向は一九七三年以降、石油不足と石油価格の上昇に対する米国の無防備が原因として、輸入面でもりわけ顕著に表われている。

しかし、変化は西側内部にとどまらず、

西側以外の諸国との関係においても進行した。たとえばソ連の軍事力は——特に核兵器の分野で——従前より相対的に強化された。中ソ対立が悪化し、中国も世界政治の舞台で以前より積極的な役割を演じ始めた。OPECはその力を余すところなく実証した。産油国、とくにサウジアラビア、クウェート、アラブ首長国連邦など少数の産油国へ富が急激に移動した。このことは、原料生産国を中心とする「商品パルー」への不安を醸成する結果を招いた。石油危機は、こうした不安やその他の要因も加わって、南北問題に真剣に取り組み必要性を西側指導者に認識させることになった。事実、第一回サミットの一週間後に、途上国、先進国を含め二十七か国の参加による国際経済協力会議がパリで開かれている。

こうして西側経済大国の指導者たちは、協議を密にし、もっと緊密に協力し合い、そしてそのことを世界に示す必要性に迫られたわけである。だが、同時にこれが新しい制度の設置につながるものでないことを明言した。事実、彼らが基本的に望んだのは既存の国内官僚制度ならびに国際官僚制度を跳び越える方法を発見することにはかならなかった。

サミットの歩み

過去六回のサミットを順次分析すると、そこにある一定のパターンが見られることは事実だがにもかかわらず、実際には、各会議の方針はそのつど決められてきた。ラングアイエでの討議は、通常の経済情勢分析にもとづいた、短期的かつかなり個別の問題に絞られたこの会議での一大成果は、金融問題における米仏両国の共同歩調が得られた点にある。これによつて一九七六年一月のIMF暫定委員会においてIMF協定の改訂合意へ道が開かれたのである。(この改訂で二重為替相場採用の法的基礎が作られると同時に、金融問題での協議、情報交換を今後頻繁に行っていくことが確認された。最貧国発達途上国がIMFからの借入れに当てられたための信託基金も設置された)ラングアイエ会議のもうひとつの成果は、輸出競争の緩和を意図した内容の合意、ならびに多角的貿易交渉を一九七七年までに終らせるという内容の合意が得られたことである(結果的には両内容とも樂觀的にすぎたが)。

六か月後に開かれたサンフランシスコ・サミットでは、金融情勢の好転、経済の順調な伸び、フォード米大統領再選の見通しといった明かるといえる要因の影響もあり、各国首脳はインフレと経済成長という共通の問題の解決に全く楽観的な自信を表明した。しかし一方において、その後各国のとった行動は協調を謳ったコミュニケと

サミット会場(一)

シヤトリー・モンテペロ

ホーツマンたちのグループが、献身的に自然のままの美しさを守ったおかげで、二百六十平方キロもある一帯は、今日でも初春には野生の花々が咲き乱れ、川では鮭が群れをなし、鹿が静かに木々の間を通り抜け、ヤマウズラがこつこつと鳴く。アルゴンキン族インディアンが住んでいた昔と、あまり変わらない情景だ。シヤトリー・モンテペロは、「領主クラア」のメンバーに、そして今では一般の人々に、スポーツ・フィッシング、スキ、テニス、トホガシと年中いろいろなレクリエーションの場を提供してきた。

シヤトリー・モンテペロは三つの主要な建物——横に長い本館、馬蹄形の巨大なカレッジ、そして従業員に住むシヤトリー・ホール——からなる。これらの建物には、一万本以上のペイスキ(米杉)の巨木が使われ、屋根は何千枚もの手割りのこげら板でふいてある。使われている木材の量は、あわせて三十万立方メートルにも及ぶという。

本館は中心部に六角形の巨大な煙突がそびえ、そこから六つの棟がのびている。煙突の根元の各面には石を深く切りこんだ炬がらがあつて、ラウンジに風格を与えている。天井は梁材が露出した造りになっており、二階、三階とも



ホテル「シヤトリー・モンテペロ」は世界最大の丸大造りの建物で、首都オタワの東およそ六十五キロ、ローレンシア丘陵地帯の林や小川、湖に囲まれた大自然の静かなたたずまいの中に立っている。現在は保養地として一般に利用されているが、シヤトリー・モンテペロはもととも一九三〇年、個人的な会員制クラブとして建てられたものである。当初の所有者であつた富裕なス